日文研叢書 49

古丁研究

「満洲国」に生きた文化人

梅 定娥

日文研

著者紹介

梅定娥（MEI Ding'e　めい・ていが）

中国安徽省生まれ。
広州外国語学院（現在、広東外語外貿大学）を卒業後、しばらく観光会社に勤務。2000年に来日し、2010年３月、総合研究大学院大学で博士号（学術）を取得。現在、中国南京郵電大学外国語学院に勤務。
主な論文に、「古丁における翻訳—その思想的変遷をさぐる」（『日本研究』第38集、2008年）などがある。

表紙：古丁写真、陳因編『満洲作家論集』實業印書館、1943年より。
　　国際日本文化研究センター蔵

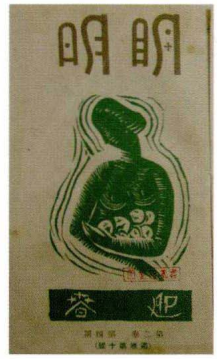
日文研叢書　49

古丁（こてい）研究——「満洲国」に生きた文化人

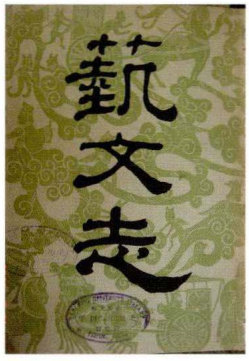
発行日　2012年3月30日
著　者　梅　定娥
発　行　大学共同利用機関法人人間文化研究機構
　　国際日本文化研究センター
　　〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町3-2
　　http://www.nichibun.ac.jp
印　刷　為国印刷株式会社

ISBN: 978-4-901558-56-3　　PRINTED IN JAPAN

『明明』第1巻第6期、1937年8月
吉林省図書館蔵

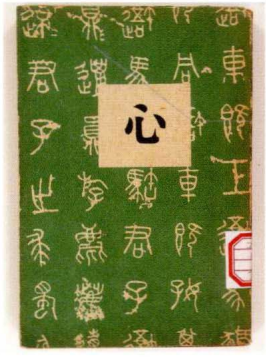


『明明』第2巻第4期、1938年新年号
中国国家図書館蔵

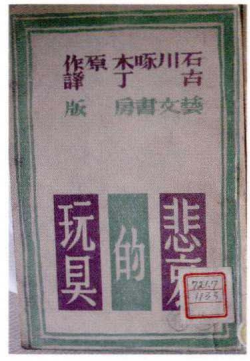


事務会『藝文志』
北京大学図書館蔵

聯盟『藝文志』第7期、1944年5月
中国国家図書館蔵

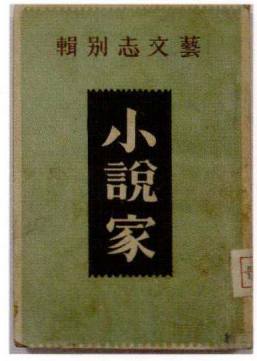


夏目漱石著・古丁訳『心』、満日文化協会
1939年、中国現代文学館蔵



石川啄木著・古丁訳『悲哀的玩具』
藝文書房、1943年、遼寧省図書館蔵

古丁著『譚』、藝文書房、1942年
国際日本文化研究センター蔵



藝文志別輯『小説家』、1940年12月
中国国家図書館蔵

古丁研究――「満洲国」に生きた文化人　目次

序

一．本研究の立場、目的と方法　3

二．古丁に関する従来の研究と、その問題点　5

三．調査概要と本書の構成　7

第一部　古丁の生涯　11

第一章　誕生から大学入学まで　13

第一節　生い立ち　13

第二節　長春公学堂から北京大学へ　14

第二章　北平時代　16

第一節　北京大学に入学　16

第二節　中国左翼作家聯盟北方部での活躍　17

第三章　「満洲国」時代　20

第一節　『明明』時代　21

一．苦悶と昇華　21

二．『明明』創刊と旧文芸との闘い　23

三．「郷土文芸」に関する論争　25

四．日中戦争と古丁　32

第二節　事務会『藝文志』時代　33

一．「漢話」への態度　34

二．「そっくりそのまま頂戴する」　37

三．健康隔離　40

第三節　芸文書房時代　42

一．芸文書房　42

二．解半知「第一建國から第二建國へ」　46

三．再び漢語保持の主張　51

四．「思無邪」から見た戦時下の思想　55

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三章のまとめ　61
第四章　「満洲国」崩壊後から死去まで　61

第二部　翻訳活動　73

第一章　日本プロレタリア文学作品の翻訳　76
第一節　「味方―民族主義を蹴る」　76
第二節　「紙幣乾燥室の女工」　78
第三節　「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争―忽卒な覚え書」　82
第二章　「満洲国」時代の文学翻訳の概況　86
第一節　「満洲国」の文芸の翻訳状況　86
第二節　「芸文誌派」の活躍　88
第三章　『明明』期の翻訳活動　89
第一節　「魯迅著書解題」　89
第二節　『悲しき玩具』　92
第四章　『藝文志』期の翻訳活動　96
第一節　『こゝろ』　97
一．出版・翻訳の経緯　97
二．言語実験としての直訳　99
三．翻訳法に見られる魯迅の影響　103
第二節　『井原西鶴』　106
一．『井原西鶴』の翻訳とその内容　106
二．『井原西鶴』翻訳の特徴　108
第三節　『譯叢』の翻訳作品　111
一．「狂人日記」　112
二．「一夜」　114
三．「夢がたり」「アッタレーア・プリンケプス」　115

四．「給仕、もう一杯」 117
第五章　芸文書房期の翻訳活動 119
第一節　『学窓と社会』 119
第二節　『若き英雄トルディ』 121
第六章　対米英戦争期の翻訳 123
第一節　『米英東亜侵略史』 123
第二節　「殲滅せんのみ」 125
第三節　「宮本武蔵」 127
第二部のまとめ 131

第三部　創作活動

第一章　北平時代――「貴重な経験――天津恒源紗廠女工の闘い」 139
第二章　『奮飛』 143
第一節　知識人題材小説 144
一．革命運動後の知識人――「頽敗――大学生らの横顔」「吉生」「莫里」 144
二．旧礼教の告発――「皮箱」 145
三．日中全面戦争開始後の詩人――「昼夜――ある詩のない詩人の日記」（晝夜――一個無詩的詩人的日記） 149
第二節　農村題材小説 150
一．農村題材小説とその背景 151
二．農村農民をいかに描いたか 152
第三節　「原野」 152
一．「味を失った塩」 153
二．社会背景の欠如 153
154

三、「原野」に現れた問題意識 155
第四節　『奮飛』について 157
一、『奮飛』の目的 157
二、「うわついた調子」 158
三、『奮飛』に対する評価 159
第三章　『浮沈』「平沙」 162
第一節　『浮沈』 162
一、凍った春、冬の時代――「春朝」（春晨） 162
二、個性の押し殺しへの憎しみ――「笑顔」 163
三、矛盾した作者の自画像――「夜語」 164
四、「無文文豪への皮肉」――「仮眠」「荒地」「聖手」 166
五、低迷文事――「窄門」 168
六、自己激励、意志、向上――「新歓」「独歩」「墨書」 169
第二節　「平沙」 174
一、「平沙」の主な内容と問題点 174
二、「芸文志派」の評価 176
三、顧盈の批評 178
四、「新」「旧」の構図 179
五、登場人物の特徴および作者古丁との関係 182
第四章　『竹林』 186
第一節　詩人の反省――「鏡花記」 186
一、作者・作品・読者（社会）三者関係についての反省 187
二、「鏡花記」に見られるその他の思考 188
第二節　資本主義社会の人間関係への批判――「マジックミラー」（哈哈鏡） 189
第三節　市民生活への関心――「盤中記」「花園」 191
一、「盤中記」 191
二、「花園」 192
第四節　強権下知識人の苦悶生活――「竹林」 193
一、「劉伶飲酒」から「竹林」へ 193
二、「竹林」と『藝文志』同人 195
三、嵇康と阮籍のそれぞれの結末に対する考察 195

第五章　「新生」「下郷」「山海外経」　196
第一節　「新生」　196
一．小説の内容　196
二．特徴　197
三．「新生」に現れた主な問題　201
四．隔離病院を出た後　203
第二節　「下郷」　205
一．「下郷」の内容とその意味　205
二．明るい農村世界　206
三．「下郷」に現れた問題意識　207
第三節　「山海外経」　208
一．内容　208
二．主題――帝国主義と中国人気質への批判　209
三．新しい文学手法の試み　210
第三部のまとめ　211

第四部　編集出版活動

第一章　『明明』と「城島文庫」　227
第一節　創刊の経緯　229
第二節　総合雑誌としての『明明』　230
第三節　文芸雑誌としての『明明』　233
一．創作　236
二．評論・エッセイ　237
三．翻訳　241
四．『明明』の収めた成果　242
第四節　「城島文庫」　243
一．「城島文庫」刊行の経緯　244
二．「城島文庫」にまつわる議論　245
第二章　芸文志事務会とその出版活動　248
第一節　芸文志事務会　252

一．芸文志事務会の成立 252
二．芸文志事務会メンバー 254
第二節　事務会『藝文志』 258
一．創刊 258
二．「芸文志派」の文学 265
第三節　その他の出版物 271
一．広告にとどまった出版計画 271
二．芸文志別輯『小説家』 272
三．「讀書人連叢」――『讀書人』と『文学人』 276
第三章　聯盟『藝文志』 279
第一節　創刊の経緯と編集上の特徴 279
一．創刊について 279
二．性格 281
第二節　聯盟『藝文志』の内容 283
一．「聖戦」協力 283
二．報告文学 292
三．古典文学との関係 293
補論一　芸文書房の理想と出版物 296
補論二　芸文書房のその他の出版物 298
一．「快読文庫」 298
二．「鑑賞叢書」と「国学叢刊」 298
三．「興亜叢書」 299
四．「日語総合講座」など 299
補論三　「芸文志派」関係の出版物 300
一．『麒麟』 301
二．『電影画報』 304
三．「新現実文芸叢書」 309
第四部のまとめ 310

第五部　結び 325
一．北平時代 327
二．『明明』時代 328
三．事務会『藝文志』時代 330
四．芸文書房時代 332
五．今後の課題と展望 335
引用文献一覧 337
附録資料編 341
①調査資料一覧 343
②雑誌の目次 348
③古丁作品一覧 358
④古丁年譜 363

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序

一・本研究の立場、目的と方法

古丁（こてい）は、一九三二年から四五年まで日本支配下に置かれた中国東北地方、いわゆる「満洲国」における「満人」、すなわち、中国人の中で最も有名な作家であった。その作品は日本語に翻訳され、日本でも出版されており、日本国内でもかなり知られていた。しかし、今日、中国でも日本でも古丁とその作品はほとんど知られていない。なぜなら、彼が活躍した時代は両国共に忌まわしいものとされてきたからである。では、なぜ、筆者は、この歴史の埃にまみれたような人物を掘り起こし、今さら光を当てようとするのか。それにはいくつかの理由がある。

日本でも中国でも、それぞれに近代史が書かれている。が、それはいずれも国家の視点によるもので民衆の目からのものではない。特に、「満洲国」の三千万人ともいわれる民衆の生活はいかなるものだったのか、彼らはいかなることを考えていたのか。それについて、日本でも中国でも細部にわたる研究は、ほとんど行われていない。一九三七年七月に日中全面戦争が始まり、四一年一二月には日本は対米英戦争に突入する。日本を後ろ盾とする「満洲国」の政策は、実は、次から次へと変わって行った。それに対して満洲の民衆はどのように反応したのか。これを明らかにしていかなくてはならない。それが本研究の第一の目的である。その一つの手がかりとして「満洲国」文壇の中心人物であった古丁を取り上げ、彼の活動の全容を明らかにしていく。

今日、ポストコロニアル論が盛んに展開されているが、肝心の植民地期の状況は地域ごとにまちまちであり、その違いを踏まえなくてはならないという指摘がなされて久しい。「満洲国」については、政治・経済などの面においては、数多くの成果が上げられてきたが、文化面の研究については、まだ資料の掘り起こしの段階にとどまっているともいわれる[1]。それゆえ、本書では、古丁を取り巻く状況を明らかにし、それによって「満洲国」の文化の実態に少しでも迫りたい。それが第二の研究目的である。

従来の日本支配期についての人物研究は、彼または彼女が親日派であるか、抗日派であるか、と単純に二分する傾向が続いてきた。しかし、たとえ「親日」だとしても、その人物が日本を百パーセント受け入れたのだろうか。そうでなければ、日本の何処に親しみを持ち、何処に反対したのか、を冷静に見極める必要がある。

そのような分析がなされない限り、評価はただ感情的な反発や共感の間を揺れ続けることになる。それでは今後の日中相互理解には役立たない。相手の文化との違いを理解し、それを踏まえた上で相手を尊重し交流する、これこそ東アジア地域のネットワーク作りの基本であり、それに役立つ研究こそが、今日必要だと考

える。そのためには、それぞれの時期における人びとの思想・信条に分け入った研究が不可欠である。

古丁は、一九一四年九月二九日に吉林省長春県に生まれた。本名、徐長吉。満鉄の長春公学堂、南満中学堂で小中学校の教育を受け、瀋陽にある東北大学に入学するが、一年後の満洲事変の際に北平（北京）へ亡命し、三二年に北京大学に再入学している。翌年、中国左翼作家聯盟北方部に入り、徐突微の名で、組織部長として活動するが、まもなく逮捕され、故郷の長春に戻る。日本支配下の「満洲国」の官吏を務めながら、古丁などの筆名で文学活動を行い、名声を得る。四一年五月には公職を辞め、一〇月に出版社兼書店である、株式会社芸文書房を設立し、社長として執筆と出版に専念するようになる。この間、日本の「聖戦」完遂に協力する言動も行っている。

日本の敗戦後には、東北中ソ友好協会の秘書となり、その傍ら文学活動を行った。新中国の成立後、五七年からの反右派運動では極右分子と見なされ、歴史反革命罪同然で、翌年投獄される。そして後、六四年、遼寧省鉄嶺監獄の中で死去する。

このように記すと、古丁の一生は、中国近代の大きな歴史的事件に次から次へと巻き込まれ、その立場は変転につぐ変転を重ねたように見える。ところが、実際のところ、この人物について、これまで知られていることはごくわずかに過ぎない。書き残した作品すら全容が明らかにされないまま、その評価をめぐって、否定と肯定の両極端の論議がなされてきた。彼の生涯と著作が掘り起こされ、その思想の変転の内実が明らかになるなら、中国近代史の一コマに新しい見方が生まれるといっても過言ではない。

古丁についての先行研究は、「愛国抗日作家」であるか、政治的な立場が「反動的」か、という二分法の中で堂々めぐりしてきたと言わざるを得ない。なぜなら、「愛国抗日」論者も、「政治的反動」論者も、互いに強いイデオロギーを持ち、互いを説得することができないからである。それゆえ、本研究ではそのような回路に入り込まないようにした。言い換えれば、本研究は、愛国抗日作家か、政治反動分子か、という問題を解決するために行うものではない。古丁のような作家は、そのような二分法で割り切ることができないからである。

本研究では、古丁という人物が、日本支配下の「満洲国」で、どのように考え、何を実現しようとしたのか、それをできるかぎり明らかにしたい。これが第三番目の目的である。それを通して、「満洲国」における中国人民衆の生活の一端が、特に文化状況が明らかになっていくだろう。本研究の目的の第一、第二、第三が、互いに補い合う関係にあることは言うまでもない。これらの目的に従い、本研究では、考察の焦点を、古丁の生涯のうち、北平左翼作家聯盟時代から「満洲国」崩壊の時期までに置く。生い

立ちと戦後については、ごく簡単に触れる程度にとどめる。

二、古丁に関する従来の研究と、その問題点

考察に先立ち、古丁に関するこれまでの中国と日本での研究の概要を紹介し、その問題点を指摘しておきたい。

二－一　中国での研究

中国文学史の中で、「満洲国」時代は東北淪陥期とされ、長い間その文学は忌まわしいものと見なされ、無視されてきた。近年、淪陥区文学研究の気運が高まり、その研究に取り組む人も現れているが、古丁という、「満洲国」では最も有名ながら、最も複雑に見える人物を積極的に扱う人はまだ少ない。

その研究成果の中で特筆に値するのは、吉林省社会科学院文学研究所の李春燕研究員が編集し、一九九五年に春風文芸出版社（瀋陽）より刊行された『古丁作品選』である。その中には単行本『一知半解集』『譚』『奮飛』『竹林』『平沙』、および翻訳作品「魯迅著書解題」が収録されている。これは、東北淪陥期文学研究史の中で初めて刊行された作家集で、この研究分野における新しい時代の到来を示している。

その編集者、李春燕は、『古丁作品選』に付した論文「東北淪陥時期文学の諸問題について古丁を評する」（就东北沦陷时期文学的几个问题评古丁）の中で、「満洲国」時代の文学が中国近代文学の一部かどうかという問題を提起し、東北淪陥期文学の性格を定義づけようとした。それは「満洲国」時代の文学が従来の中国文学史の中で無視されてきたことに対する提言であり、その問題意識は中国近代文学研究史に大きな意味を持つものと思われる。

李春燕はそこで、「日本統治という特殊な時期を認識すると同時に、文学自体の複雑性も視野に入れる。この特殊性と複雑性を結びつけて、個々の作家を具体的に考察するなら、文学の表面に惑わされず、その本質を見定めることができるかもしれない」（看到日伪统治时期历史的特殊性，同时也要看到文学自身的复杂性，把特殊性和复杂性结合起来，然后运用到具体作家身上，那可能就不会被表面上的文学所迷惑，而能透过表面看其本质了）[2] と、研究方法を示しつつ、「芸文志派」の創作傾向は、健康的で積極的で、抗日愛国的だと結論づけている。個々人については、「深くて計略的（あるいは面従腹背）な古丁、完璧な芸術を追求する小松、郷土色が濃い疑遅、古を持って今を喩える外文、鬼才を放つ爵青」（志谋深算（或者叫面从腹背）的古丁，追求完美艺术的小松，乡土气息浓厚的疑迟，以古喻今的外文，具有鬼才的爵青）[3] と評している。

古丁の態度が「面従腹背」だと評したのは、李春燕が初めてで

はない。「彼（古丁）の『面従腹背』は、日本のインテリゲンチャに見られた『偽装転向』とは本質的に異なっている」[4]と、尾崎秀樹が『旧植民地文学の研究』（勁草書房、一九七一）ですでに言明している。「面従腹背」とは、表面上は従うが心の中では反発することである。古丁は表面上は「満洲国」や日本に協力しているように見えても、実は、日本のやっていることに反対していた、と取ってよい。「面従腹背」が古丁のイメージとして定着しているように見えるが、果たしてそうであろうか。

古丁が一九四四年から四五年にかけて発表した「新生」（四四年二月）、「下郷」（四四年九月）、「山海外経」（四五年七月）は、それぞれ「民族協和」「勤労増産」「米英撃滅」をテーマにした作品である。これらは、『古丁作品選』には収録されていない。つまり、李春燕は、この三篇を外して古丁を語っていることになり、その点が、李春燕による古丁研究の欠落と言える。

『古丁作品選』には、馮為群「事に即して事を論じることについて—鉄峰への返事」（関於就事論事答鉄峰）という評論が収録されている。これは、鉄峰が論文「古丁の政治立場と文学功績」（古丁的政治立場与文学功績、一九九三）の中で、古丁には、文学上の功績はあるが、大東亜文学者大会への参加や「親邦日本」という発言などから見れば、日本に追随しており、その政治的な立場は反動的だ[5]、という見解を示したことに対して、馮為群が李春燕に似た見方を示したものである。だが、果たして古丁の態度を「面従腹背」と見なすことによって、鉄峰のような古丁の政治的立場と文学的立場を分けて考える見方を完全に覆すことができるだろうか。「民族協和」「勤労増産」「米英撃滅」をテーマとする作品群を、どのように評価したらよいのだろう。

二-二　日本での研究

日本では、尾崎秀樹が、いち早く古丁について言及したが、その後、中国文学の研究者、岡田英樹が、八〇年代から一人でこつこつと満洲文学の研究を行い、古丁についても考察を重ねてきている。その先見性と堅忍性は尊敬に値する。岡田はまた、古丁の左翼時代の革命仲間である端木蕻良や、総務庁時代の同僚、そして古丁の息子で清史研究者の徐徹など、古丁の親族や知人と交流し、文献に現れない古丁に関する事実を引き出してきた。その岡田は、古丁について、次のように述べている。

> たしかに古丁は、満洲国文芸政策を立案し、実施に移す先頭に立っていた。その発言の中から国策追随、日本協力の痕跡をひろいあげることはたやすい。しかし、上記実践啓蒙者としての視点から、かれの発言と行動をながめてみると、す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com